

多様化・複合化する福祉課題への対応の促進①

～「複合的な課題を抱える親子」を支える母子生活支援施設の視点～

社会的孤立や生活困窮にある方の生活支援について議論されるなど【関連記事4面】、地域の中で顕在化しづらい、支援につながりづらい方への支援体制が見直されようとしています。そこで今月からの連載は「複合的な課題を抱える親子」に注目し、地域の見守り・支援の課題を探っていきます(全2回)。今回は、本県の母子生活支援施設の取り組みを出発点に考えます。

【事例】 絡み合う母子の生活課題

夫からDV(家庭内暴力)を受け、幼児2人(姉弟)を連れてシエルターに一時避難したAさん。パート就労が決まり、新たな土地でアパート生活を始めました。

ある日、役所に「乱暴で困った子どもがいる。母親がその場においても子どもに注意もしない」と通報がありました。Aさんの長女が長男を執拗に叩いているところを何度も見かけたという内容でした。

翌日、役所のケースワーカーがAさん宅を訪問すると、家の中は散らかり、何日も掃除していない様子が伺えました。眠たそうに目をこするAさんに子どもたちはしがみついたり、ケースワーカーの顔をじつとつかがっていました。

主任児童委員と協力し、ケースワーカーが訪問を続けて数カ月。Aさんがうつ病で受診していること、夜眠れなくなり昼夜逆転して子どもの面倒をみられなかったこと、体調不良が原因で退職したことなど、少しずつ、Aさんたちの生活の様子がみえてきました。



「最初は必死だったけれど、私の中の何かが壊れてしまった。それ以来、何もする気が起きないんです。私も小さいころから、弟妹の面倒を見てきました。(長女に)これくらいさせて当然でしょう」とAさん。

一方、長女は「ママは頑張っているんだから悪く言わないで」「弟はかわいいけど、言うことを聞かないときはぶつしかないでしよう」と主任児童委員に話していました。

「一度ゆっくり休んで、子どもたちとの生活を立て直してはどうでしょう。今後の就職先や離婚のことも相談できるし、子どもの様子も一緒にみてくれますよ」

ケースワーカーから母子生活支援施設(※)の紹介を受けたAさんは、主任児童委員からの勧めもあって、子どもたちと一緒に施設に転居することを決めました。

※「配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、これらの者を保護するとともに、これらの者の自立の促進のためにその生活を支援し、あわせて退所した者についてその他の援助を行うこと」を目的とする、児童福祉法上の社会福祉施設。

多様化・複合化する課題への 支援体制の充実を

昨年度、本会が政策提言のために行った課題把握調査では、多様化・複合化した課題を抱える人たちが、

母子生活支援施設やホームレス支援施設、刑務所出所者を支援する更生保護施設につながっている現状があり、支援体制の充実が必要であると提言が挙がりました。

本会母子生活支援施設協議会(県内13施設で構成)からは「DVを受けた人、精神障がいや知的障がいのある人、外国につながる母子、ひきこもり児童など、複合的な福祉課題のある利用世帯が多く、そうした方々への対応に難しさを抱えている」と声が上がっています。

親子を地域に送り出すための 継続した支援体制づくり

そこで、母子生活支援施設の取り組みと課題について、本会同施設協議会会長の宮下慧子さん(カサデ・サンタマリア施設長)にお話を聞きました。

施設退所後の生活を見据えて

支援の流れとして、まず役所を通じて、母親からの申し込みを受け付けます。母子と面談を行い、児童相談所・行政関係課・保育園・学校・病院等の関係機関とも話し合いながら、現在の生活課題を整理し、退所までの目標について話し合います。

入所が決まると、母親と一緒に、2年後の退所を目安とした「自立支援計画」を作成します。入所中は、

この計画に基づいて、離婚手続き等の調整・就労や就学の支援・公営住宅の申し込みの情報提供などを行いながら、退所後のアフターケアも並行して考えていきます。

DVをきっかけに施設利用につながる世帯は多いですが、ここに至るまでの経過は実にさまざまです。母親が育った環境から引き継がれた課題、病気や障がいなど母子が個別に抱える課題など、たくさんの要素が複雑に絡み合い、世帯の生活課題となつて現われます。

何よりもまず、親の心の状態が安定しないと、子どもの生活も落ち着きません。親子の力で次のステップに進むためには、安心して生活できる環境を施設の中に整えること、土台となる人間関係を築いていくことが大切だと思います。

親子の暮らしを守り支える

入所後の生活が安定してくると、それぞれの家族の生活スタイルがみえてきます。母親が安定した収入を得られるようになって、家計管理が上手くできず、子どもが食べる物にも困ってしまう世帯もありました。それぞれの世帯にとっての自立とは何か、親子の主体性と能力を見極めながら関わっています。職員にとっても試行錯誤の毎日です。以前、施設に入所していた子ども

が「施設の行事に参加していたから、友だちと夏休みの思い出を対等に話すことができた。母親と二人きりの生活では、きっとできなかったことだ」と話してくれたことがありました。母親と施設で過ごした日々が、懐かしく嬉しい記憶として子どもの心に刻まれている。そのことを忘れてはいけないうと、改めて気づかせてくれました。親子で過ごした時間と経験が、やがて大人になっていく子どもたちの生きる力になると思います。

一方で、結果として親子分離になつた世帯もあります。親子の安全な暮らしのために、関係者が積極的に介入し、親子に個別の関わりを持つことも必要です。



母子生活支援施設では、七五三やひな祭り、餅つきなどの伝統行事も行われています

継続性のある自立支援を

厚生省は『社会的養護の課題と将来像』の中で、「施設による親子関係の再構築支援の充実」を挙げています。分離後の親子関係の再構築はもちろん、分離に至らない段階での親への支援、生い立ちや親との関係について心の整理をつけられるような子どもへの支援が重要であり、世帯を丸ごと支援する母子生活支援施設の活用についても明記されました。

ただ現実には、裁判所やハローワークの手続きや、母親の受診に付き添いが必要だったり、虐待を受けた子どもや障がいのある子どもへの時間をかけた関わりが必要だったり、現場の職員体制にはとても厳しいものがあります。

また申請に基づく利用制度のため、入所・退所は母親が判断することになります。施設職員から見ると、地域生活を営む上での生活課題が解決しないまま退所する世帯もあり、不安が残るまま送り出している現状も少なからずあります。施設の役割上、親子は必ず退所していきます。入所時からそれを念頭に置いて母子に関わっていくこと、そうした世帯の地域生活を継続的に見守り・支援していくためにも、地域の関係機関との連携は大きな課題です。

(話・宮下会長)

その人らしさ、生きづらさをありのまま受けとめる

複雑に絡み合った生活課題を整理し、制度・サービスにつなげていくことは福祉関係者に期待される役割ではありますが、「福祉サービスにつなぎ合わせるための課題整理」は、法制度のはざまにある生活課題を見落としたり、親族との関わりを弱めてしまったり、その人らしい生き方を結果として阻んでしまうことにもつながりかねません。

「社会との関わりに不器用な人や人間関係を築くことに時間がかかる人が増えている。そうした人たちが地域で安心して生活できるように、土台となる信頼関係を築くことが福祉施設の役割ではないか」

まずは困りごとのある人の思いを受けとめること、複合的な課題を抱える世帯をありのまま受けとめること、その生きづらさに向き合うこと。宮下さんの言葉には、私たち福祉関係者が省みるべき、原点の姿勢がみえました。

(次回は「複合的な課題を抱える親子」の在宅生活を見守り・支える関係者の取り組み課題を探ります)

(企画調整・情報提供担当)

